

つまみを回すと人形が壺を持ち上げたり、包丁でスイカが割れると同時に目玉や舌が飛び出すなど、滑稽なからくりが特徴の「神戸人形」。ご存じだろうか。明治中期、外国人観光客のみやげ用に作られたのが発祥といわれ、「お化け人形」の名でも親しまれた。約130年の歴史をもつ郷土玩具である。かつて「兵庫の津」と呼ばれ、国内交通の要衝であった神戸港は1868(慶応3)年、国際貿易港として世界に扉を開けた。開港にもとない、外国人居留地が形成され、大勢の外国人が神戸にやってきた。そんな居留地に近い人気のハイキングコースが和歌にも詠まれた名勝・布引の滝で、付近の茶店では神戸人形が売られていた。工芸品の趣のある神戸人形は日本のみやげものとして外国人に喜ばれたようで、海を渡り、海外でコレクションされるものが多くあるという。

神戸人形は1929(昭和4)年、天皇行幸の際、地元の名産品として献上され、一般に知られる機会を得たが、それも束の間のこと。戦後5年目、当時ただ一人の作家だった小田太四郎氏が亡くなり、廃絶してしまっただけ。しかし愛好家たちの尽力で1959(昭和34)年、元町商店街の玩具店「キヨシマ屋」において、神戸人形を復活させた。数岡雅敦氏の作品が販売されるようになり、さらにポルトピア'81の売店で神戸人形が取り扱われたことから、「こんなおもしろい人形がある」とブームが沸き起こった。だが、阪神淡路大震災の影響でこれまで通りの販売活動ができなくなり、神戸人形は不要不急なものとして忘れ去られてしまい、二度目の廃絶を余儀なくされた。

約600点の神戸人形を所蔵する日本玩具博物館(姫路市)では木工業者に部品製作を依頼し、工芸家による組み立てで神戸人形の復刻に取り組んでいたが、いつの間にか途絶えてしまい、いわば三度の目の廃絶となった。そんなときに現れたのが、人形劇美術作家の吉田太郎さん

関西の名工
Master Craftsman of Kansai



神戸人形作家

吉田太郎さん

1969年神戸市生田区(現、中央区)生まれ。小学生の頃、キヨシマ屋のウィンドウを見て以来、魅了される。大学卒業後、人形劇団東京に所属。1995年に独立し、演劇人形専門の美術工房「工房太郎」を設立。2015年より「ウズモリ屋」を併設し、神戸人形の製作・販売を始める。



写真左/小刀で人形の目玉を整える。「刀の刃先が当たり、どこかに飛んでしまうことも。手間のかかる作業なので、目玉はどこ行った!と大騒ぎします(笑)」。写真中/からくり仕掛けのようす。写真右/神戸人形には太鼓や三味線、木琴などを奏でるテーマのものがあり、これは今風にアレンジした吉田さんの作品「バンド」。つまみひとつで27本の糸が動き、全部の人形が楽器演奏する大作だ(非売品)



写真左/昔ながらのテーマのひとつ、酒を呑むからくりの「大壺」。写真中/文楽で用いられる滑稽なからくりを取り入れた「梨割」。いかめしい侍が相手に刀を振り落とすが、ずんばらんと割れた切り口から血みどろの笑顔が……侍の驚く顔はまるでコントだ。写真右/今年の干支神戸人形「辰」。舌をへろへろしながら辰が爆走する。干支シリーズでは縁起の良い色とされる赤色がよく使われる。



神戸人形の魅力を存分に紹介した吉田さんの著書「神戸人形 歴史と神話」(新刊総合出版)神戸市/2000年刊/1000円(送料別)

ウズモリ屋
兵庫県神戸市東灘区住吉山手8-6-22
TEL.078-846-2196
(遠信販売を実施中。屋号で検索を)

元町商店街[本高砂屋]内に設けられた神戸人形コーナー。「きんづばも神戸人形も元町を象徴するアイテム。気軽にご覧ください」(吉田)

へんてこでユーモアたっぷり
の工芸品
世界に愛された神戸人形



梨割の侍の顔を調整しているようす。糸の張り具合がからくりの「間」を左右するため、何度も動かし、確認する。「最近の取り組みとして、なるべく地元の木を採用するようにしています。干支シリーズの辰は六甲山の整備間伐材のナナミノキを、寅の干支では伐採したクスノキの街路樹を主材料にしました。クスノキはいい香りですが、さすがに作っているときは頭がクラクラしましたね(笑)。日本玩具博物館には貴重な神戸人形が展示されているので、そちらにもぜひ、お越しください」

だった。

「震災のとき、僕は京都の人形劇団に勤めていたが、その後独立し、神戸に工房を構えたんです。生まれ育った神戸の風景が大きく様変わりし、子どもの頃、キヨシマ屋のウィンドーですつと眺めていた神戸人形もなくなってしまったので、くよくよしていました。そんな気持ちを引きずっていたら、仕事のパートナーでもある妻が「あなたが作っていたらいいじゃない」と背中を押してくれたんです。人形劇の舞台美術をやっているのだから、人形製作はお手のもの。写真などを見ながら2日ぐらいで試作品ができました。しかし、実物が手元にならないので、これで合っているのか不安でたまりません。ヤフーオークションで神戸人形を手に入れ、正解とわかり、ほっとしました(笑)。今後、本格的に神戸人形を復興させるには趣味ではなく、仕事として取り組む必要があると思いました。勝手に銘打つわけにもいかず、日本玩具博物館に相談したところ、貴重な人形や資料に触れさせていただくなど全面的に協力してくださいになりました」

人を食ったような滑稽さが心をくすぐる

お化け人形とも呼ばれた初期は落ち武者やお化けをフィギュア(彫像)したものでしたが、のちに箱に乗ってからくりで動作するようスタイルに定着した。箱の中に軸と糸を仕掛け、つまみを回すことでシーソーのように人形の部位が動いたり、上下回転をする。あるいは車輪をつけ、人力車のようにコロコロ動くバリエーションもある。「黒く着色しているのも神戸人形の特徴です。黒色にしたのは漆の風合いを出したかったのかもしれない。漆は英語で「ジャパン」と呼ばれており、日本製の人形を表現するには黒色がよかったのでしょう。別の見方をすれば、複合的な材料を使った場合、黒に塗ってしまおうとわからないという理由もあります。人形のモチー

フはお化け、おじいさん、おばあさん、お坊さんなどで、ちょっとグロテスク趣味というか、今でいうキモカワ、コワカワみたいな感覚ですね」

ウズモリ屋の神戸人形はホオやブナなどが主体で、作業は材木を板にすると、ころから始まる。人形部分は木工ろくろや手彫りで成形し、その一方で箱を組み立て、軸と糸でからくりの部分を作り、動きを調整する。仕上げの塗装は複数回行う。これらすべて手作業だ。フォルムの美しさとからくりの正確性が求められるので、完成には長い時間がかかってしまう。「昔、一部の高価な神戸人形は刀、三味線のバチ、目玉などの白色の部分に象牙を使っていました。それ以外は牛骨が多いですね。今、僕たちはエゾジカの角を使っています。角の表面部を機械で切り取り、いろいろなパーツを作りますが、目玉はとても小さいので神経を使います。ときどき、くじけそうになります。神戸人形は楽しさを感じることが多い仕事ですし、複雑な仕掛けはほとんどなく、高度な技術も必要ありません。神戸人形という名前なのに、ハイカラとは無縁で全然神戸らしさありません。名前からしてトボケていますよね。へんてこで人を食ったような滑稽さ……そんな空気が神戸人形の魅力だと思います。飄々としたユーモアセンスを理解できるのは大人だけとは限らず、からくりで動くものがとても好きなお子さんがときどき現れては、熱心に見学されます。あ、昔の自分がやってきた!と思ってしまう(笑)」

神戸人形は親から子へと代々受け継がれてきたことはほとんどなく、途絶えることとまた別の人が作り始めるという不思議な伝統があるという。「誰かに直接バトンタッチすることにとられず、こんなん作りたいたいと思う人が出てくるより、さっさとした神戸人形を残していきたいですね」

〔訃報〕 本記事取材後、急病により、神戸人形作家の吉田太郎さんがお亡くなりになりました。享年54歳。謹んでお悔やみ申し上げます。